

都道府県別賞一等

祖父を救った生命保険

石川県 金沢大学附属中学校 二学年

北川 朋佳

生命保険に入る必要なんてあるのだろうか、「私はまだ若いから」「健康で風邪もひかないから」という理由で、生命保険に入らなくてもよいと思っている人は多いのではないだろうか。実際、私もそう思っていた一人である。そもそも生命保険がどういうものかわからなかったし、知ろうとも思わなかった。私と同じように生命保険について考えたこともないという人はたくさんいると思う。私が生命保険について考えるようになったのは、つい最近のことである。

「ガンが見つかった。」

久しぶりに親族で集まった会食で祖父は切なそうな顔をしてそう言った。定年退職後ジムに通ったり、散歩をしたり、運動を欠かさず健康に気をつかっていた祖父。いつも元気で笑顔の、祖父のその発言が私には衝撃的だった。ガンになる確率は三人に一人、いや二人に一人と言われる時代だということは知っていたが、まさかこんな身近な人がガンになるとは思ってもいなかった。祖父には持病があり、開腹手術や放射線治療は難しいと担当医はおっしゃったそうだった。祖父にみつかった食道ガンは内視鏡では取り切れない範囲に広がっており、家族はこのままガンを受け入れながら生活するしかないのかとみんな暗い雰囲気となった。

そんな状態がしばらく続いたある日、祖父は私たちにこう言った。

「陽子線治療を受ける。」

祖父は先進医療特約のついた生命保険に入っていたのだ。ガンになった話を保険代理店の人に話したところ、先進医療の話をされたそうだった。そこで早速、祖父は全国の陽子線治療ができる病院に問い合わせた。その結果、一つの病院から受け入れてくれるという回答を得ることができたのだ。陽子線治療とは、放射線治療とは違いガンの患部のみに照射する治療方法で、祖父の体力的にも問題はないらしい。しかも生命保険に入っていたおかげで手術費用はもちろん、今回は治療のための宿泊費・交通費にもあてることができたので、金銭的にも安心できたそうだった。

約三十回の照射が必要な祖父は、今も治療中だ。会えてはいないが、先日メールが届いた。「内視鏡検査の結果の報告がありました。ガンは順調に消されてきているようです。この調子ならば入院もせずに、予定どおり通院だけで終わりそうです。」とのことだった。この話を聞いて、私は心底ほっとした。

第61回中学生作文コンクール

これまで、私は生命保険の必要性について考えたこともなかった。しかしそれは決して他人事ではない。祖父が今、こうして安心して治療を受けられているのは、生命保険に入っていたおかげなのだから。生命保険は死んだ後に残された人のための保障だと漠然と思っていたが、実は生きるための選択肢でもあるということに、今回初めて気がついた。祖父の治療が終わるのは今月末。早く元気で笑顔の祖父が見たい。